エイズ発病の不安。次々と友人が薬害エイズで殺されていく悔しさ。怒り。薬害エイズの裁判に加わり、なぜ自分がＨＩＶに感染させられなければならなかったのか、いったい誰に責任があるのかをはっきりさせたいと思いました。

国と製薬企業を相手にした裁判は勝てないと言われていても、なんとしても勝ちたいと思いました。

また、差別の中で隠れて生きるのではなく、堂々と生きたいと１９歳で実名を公表しました。どんな反響が起きるのかまったくわかりませんでした。でも、薬害エイズを知った多くの若者が自分たちの問題として、自分たちにできることはないかと立ち上がりました。

それは多くの人たちに伝わり、全国の人たちが動き出していきました。そして画期的な裁判の和解へとつながっていったのです。

１０歳でＨＩＶ感染の告知（知らせ）を受けてから、人は何のために生きているのだろうかと考えてきました。「楽しく生きたい」と思いました。でも、それは社会が平和であったり、いのちや人権を大事にする社会であってはじめて本当に楽しく生きられるということを、僕は薬害の被害にあってはじめてわかったのです。

いま、何もしないで、あきらめてしまうのではなく、最後まであきらめないで生きていきたいと思います。薬害エイズのときもそうでした。「どうせ、何をしたってむだだ」とあきらめるのではなく、周りの人たちと一緒になって取り組んできたことが、一人ひとりを動かし、その一人ひとりが行動したことが画期的な裁判の和解へとつながったのです。

あきらめなければ、できることがあります。

＜　川田龍平ホームページより　抜粋　＞